

教界に於ける南條先生

稻 葉 昌 丸

明治五年五月我が本山は寺務の大改正を發表し、新に事務所を開設し、篠原、石川、小早川渥美等の諸氏事務の衝に當る。南條先生自叙傳を案するに、先生時に齡二十四歳、五月廿三日事務所記室長となり、六月には進んで掌儀（今の録事）となる。明治八年十二月予の育英敎校に入學するや、先生は現に敎育課録事たりき。翌九年先生は本山の命を受けて、笠原研壽師と共に英國に遊ぶ、梵語學研究の爲なり。爾來先生は本山事務と關係を絶てり。先生英敏の質、學事に敎導に事務に往く所として可ならざるなきに、明治十七年歸朝已來、先生は甚だ事務を喜ばざる風あり、事務に關與すべき機會は一再ならざりしも、毎に之を避けたり。たゞ學校の

事に關しては敢て必ずしも辭せず、名古屋普通敎校々長、眞宗中學寮長、眞宗大學々監に歷任せり。眞宗大學が單科大學令によりて大谷大學となりたるは實に先生の盡力によるなり。明治廿七年九月、先生が眞宗第一中學寮長となるや余は先生の下に主幹の一人たりしが、先生は寮内細大の事務を主幹に委任し容喙する所なく、而も自ら大綱を失ふことなかりき。その眞宗大學に於けるも同然たりしといふ。明治廿九年所謂白河黨の革新運動に際して、村上博士は東京第二中學寮長の職を抛ち、熱心に各地に遊説せられたるが、先生は此運動と不即不離の關係を保持し、三十年の春京都に於て演說會を開くや諸有志は革新の已むべからざる所以を痛論せし

に、獨り先生は一月崩御ありし皇太后陛下の御諡號英照の二字につき、その典據意義を説きて一座を呆然たらしめし事ありといふ。明治四十年比、彰如上人は先生と余とを召びて寺務に當らんことを囑せられしに、先生は直に答へて云く、養父はかねて文雄の事務の才にあらざるを誠め置きたる事なれば、平に御斷りを願ふと。蓋し先生の行動はこの訓誡に基けるなるべし。

されば學事の外布教の事に關しても、先生は少しも辭する所なく、本山の命とあれば萬事を攔きて之に趣けり。近年我が一派に於ける大法要と稱すべきは、明治四十四年の宗祖六百五十年遠忌法要と大正十二年の開宗七百年紀念法要との二なるべし。此等法要の準備として、先生が彰如上人に從ひ、全國到る處に教を布かれたるは衆知の事なり。先生は本山の命のみならず私人の招待も亦辭するなく、百里の遠きも敢て意とせず、諄々説いて倦むことを知らず。故に先生の足跡は全國に遍く、三たび北海道に赴き朝鮮、滿洲、上海等も到らざる所なし、たゞ不

思議にも臺灣のみは行かれたるを知らず。爲に本山は碩學を遇する途を知らずとの非難を生ずるに到りしかども、先生にありては一身を賭して法に殉ずるの外他意なかりしなり。爲法不爲身は實に先生のモットーたりしなり。而して講話に際して先生には詰屈の理論を弄するを喜ばず、努めて平易の言語を以てよく幽遠の旨趣を表現せしを以て、聽くもの解し易く、先生の爲に入信したる者尠しとせず。又先生は同一の處に同一の話題を再三講ずるを敢て意に介せず、而して聽く者は、一回は一回より其感を新にせり。蓋し其言肺腑より出るを以てなるべし。先生によりて全國に法雨の潤ひたる、甚大なりといふべし。

先生の自叙傳に云く、「(大正十二年二月)廿二日前住上人の葬儀に參列し、列中余は疾を發せしも、強て葬場に至り、又疾を力めて洛東花山の火葬場に奉送せり。廿三日余は本山より法主親言書の複演を命ぜらる。廿六日疾未だ癒はず因りて暇を乞ひ、廿七日東京に歸臥せり。(中略)

(四月)八日京都に歸れり。九日より十五日までは我が本山の立教開宗七百年紀念法要の執行日なりき。(中略)十六日午後余は五條大橋東善立寺の敬老會の發會式に講話し、身心二命及び平生業成の教義を述せり。夜は西六條の顯道會館に赴き信是義本の講話を爲せり(是を今年講話の終りとす)。十七日早朝余は京都を發し、午後二時講話の爲めに福井別院に到りしに、突然流行性感冒に罹り、一時肺炎となり、過度の衰弱の爲めに絶待の安靜を要すとの診斷を受け、復た一事を爲すこと能はざりき。親戚諸友報を得て來れる者頗る多し、困りて友人に囑して書を作り、十八日後の曾約の講話を辭し、安臥して藥を服すること三十餘日にして東京に歸臥し、専ら靜養を事とせり。八月卅一日余は腦貧血に罹りて卒倒せり。九月一日大震災に遭ひ、二日夜類焼の難に遭ひ家屋も書庫も烏有に歸せり。唯全家の死傷を免れたるを幸とするのみ。」と。此歲先生實に七十五歳なり。嗚呼、先生强健の身體曾て異常を呈せざりしも、遂に多年の奮闘

に堪えず、起つ能はざるに到れり。爾來先生は靜養を事とするも、病狀は一進一退あるのみ。昨年十一月九日耆宿會召集により余は本山に至れば、先生の訃音突如として到る。一座驚愕、大樹僵れたるの感あり、涙も出るに暇なし。余幼にして先生の恩顧を蒙り、毎に先生の心を心とせんと努むれども、菲才その萬一に及ぶ能はず、慚愧この記を作る。